

日本山岳会と私の登山①

ナンダ・デヴィ・プロジェクトと 日本山岳会

鹿野勝彦

70年代以降80年代にかけて日本山岳会のヒマラヤ登山は、高い目標をかかげながら、多くの若い登山家を育ててきた。高齢化が進む山岳会だが、当時のヒマラヤ登山を実践した若い会員に、今後の山岳会と登山を語ってもらおうと思う。1回目は、彼らを導いた鹿野勝彦氏にお願いした。

「ナンダ・デヴィに行きませんか」
梶正彦からはじめてその声をかけられたのは1974年初夏のことだった。久々にインドがナンダ・デヴィを開放する。ただし条件はインドとの合同登山で、実施年度は1976年だが、その前年にはフランス・インド隊が予定されて

いるという。冷静に考えれば少なからぬ問題を含む内容だったが、だが、あまりためらいもせず私のがのつてしまったのは、ナンダ・デヴィという山の魅力もさることながら、チョモランマ（エヴェレスト、1970年、日本山岳会）、チューレン・ヒマール（1971

年、東大）、チョモランマ（1973年、第二次RCC）という、その前5年間に私が参加したネパール・ヒマラヤでの3回の登山隊のありかたに相当にいらだちを感じていたからだ。言いかえれば、自分で納得のゆくヒマラヤ登山を、一から組み立ててみたいという思いが強くなっていた。

30年余りを経た今、「日印ナンダ・デヴィ登山隊1976」というプロジェクトの立ち上げのプロセスをたどることがどれほどの意味を持つのか、正直なところ私にもよくわからないのだが、日本山岳会の、あるいは日本の登山界のヒマラヤ登山のありかたが、1970年代に大きく変わったことを前提に、当事者の一人として、当時何を考えながら計画を進めてい

たかを、とりあえず率直に書きとめておくことにしたい。

*



BCに集結したメンバー。背後のナンダ・デヴィが威圧的

そのころ私が感じていたいらだちとは、具体的に記せば以下のようになる。

まず、登山隊ないし隊員の、目的意識のあいまいさ、である。1970年と1973年の、私が参加したこのチョモランマ登山隊は、いずれも南西壁からの登頂を主目的としてかかっていたが、それには失敗した。その結果は止むを得ないとしても、それぞれの隊は本当に当初の目的に全力を投入したといえるのか。むしろ、いつのまにか「世界最高峰」の頂上に、「日本人として」ないし「秋季」にはじめて登頂するといった、より安易な目標にすりかえられ、その「成功」に満足してしまったのではなかったか。

第二には、かかげた目標と隊の実力との明らかな差、である。1970年のチョモランマの隊は、そもそも本格的に南西壁からの登頂を狙える隊として編成されたのか。1971年のチューレン・ヒマール隊は、私自身が登攀リーダーを務め、縦走を目的にかかっていたが、これも現場に立って早々に、7000mを超えざる双耳峰の縦走など、私たちの力の及ぶ範囲



東峰のC1からC2へ向かう嶺野、長谷川の両隊員。左の尻根が東峰から西峰へ延びる主稜線

にないことを思い知らされていた。そこへゆくと、1973年の第二次RCC隊の場合はむしろ個々には優れた力を持つ隊員をそろえながら、組織として機能しなかった。だが、それらの基本的な問題も含めて、結果を真剣に検討し、そのうえで次の計画につなげてゆくという具体的な動きは、どの隊にも、またその周辺にも見えていなかった。

* ナンダ・デヴィは主峰が標高7

816m、東峰が7434mの双耳峰で、インドではネパールとの国境線上にあるカンチェンジュンガを別とすれば、最高峰ということになる。初登頂は主峰が英米隊による1936年、東峰がポーランド隊による1939年と、イギリス植民地時代にさかのぼる。その後はフランス隊が1951年に縦走を試みて遭難した他は、政治的な理由から入域制限が行なわれたこともあり、1964年にインド隊が第二登に成功したくらいで、これほど著名な山にしては登山隊

の数は少ない。

目的は「縦走」以外には考えられなかった。デュブラによる1951年の縦走計画は、当時としては常識を超えるものだった。その後もヒマラヤで複数のピークを結ぶ縦走の試みは、私自身が手がけたチューレン・ヒマールを含めても、ごく限られており、成功の例はまだない。それだけに魅力的な課題である一方、当時の私たちの力からすれば、十分に成功の可能性はある。そう考えていた。

計画の立案にあたってのキーポイントには三つに絞った。第一はベースキャンプまでの輸送である。いわゆるキャラバンのルートとしては桁はずれに困難なリシ・ガンガのゴルジュ経由の輸送を、いかにスムーズに行なうかだけでなく、ある程度それが遅滞したとしても、可能な範囲でベースから上の登山を展開してゆけるだけの柔軟な計画と、それを実行できる態勢をつくる必要がある。

第二は、縦走隊を送り出す側と収容する側それぞれのサポート態勢を、いかに効率よく、かつ緊密な連携をもって構築するか、である。縦走といっても縦走隊そのもの

のが独自に行動する範囲を主峰―東峰間と想定すれば、登山の大半は二つのピークを目指す極地法ということになる。あまりに大規模な組織を組むことは、単にスマー卜でないのみならず、第一点との関係から、不利でもある。ヒマラヤ登山の古典的手法であり、私たちがなりに習熟もしてきた極地法の、洗練された形をどれだけ発揮できるか、特に縦走隊の動きにあわせて受け入れ態勢を整備しなければならぬ収容側の力量が問われる。

第三は、最終段階で未知の稜線を独力で突破しなければならぬ縦走隊員の、個としての力量である。そこは従来からの極地法的な登山の発想を超えた、アルパイン・スタイルの登山の実践経験がものをいう世界になるはずだ。

*

はじめにも記したように、このプロジェクトは、もともと日本山

岳会という組織、ないしその運営に熱心に携わってきた人々のなかからスタートしたわけではない。梶にしても私にしても、会員であり、また会そのもの、ないしその学生部の登山隊に加わった経験もあったが、それだけのことだ。インド登山財団との折衝も、当初は梶が、日本山岳会との合同登山となることを前提としつつも、個人として行なっていた。

たしかに登山隊の派遣主体はある段階からは会の臨時の組織としてのナンダ・デヴィ委員会(村山雅美委員長、宮下秀樹事務局長)となり、最終的には日本山岳会創立70周年記念事業との位置づけも

なされた。

しかし、プロジェクトは、終始有志集団のものであり、そのチームの側からすれば、日本山岳会という組織は、計画を実行するのに便利な枠組以上のものではなかった。会の側からしても、当時の今西錦司会長の「モラル・サポートは惜しまん」という言葉に象徴されるように、基本的には有志集団の自己責任でやればよい、という姿勢が貫かれていたのであり、マナスルからチョモランマまでの、会の全力をあげて取り組む登山隊とは位置づけそのものが異なっていた。

私や梶にとつて、それは望むところであった。隊の編成やインド側との折衝などについては、完全なフリーハンドを与えられたからである。隊員については、半数近くはこの計画に参加するまで、日本山岳会の会員ですらなかったし、縦走やサポートの主役をになうはずのメンバーの大半は、大学山岳部のOBでもなかった。

一方で、これといったヒマラヤ登山の実績を持たない者も、数人はいた。私としては計画を動かしていくにあたっては、渉外や輸送

などさまざまな局面で必要とされる、多様で異質な能力を持つメンバーを集めてチーム編成したかったのであり、登攀のキャリアだけを重視するつもりはなかった。ましてや日本山岳会での活動歴や、出身の母体などは、問題外だった。

*

現時点でこのように勝手なことが書けるのも、ナンダ・デヴィの縦走が、幸運にも恵まれ、結果として成功したからに他ならないが、それはそれとして、このプロジェクトが、以後、チョモランマ、カレンチエンジュンガ、ナムチャバルワへと続く日本山岳会のヒマラヤ登山のあり方や、そこで活躍する人材をある程度規定していったことは、たしかかなようだ。ただその意味なり功罪なりを評価するのは、私の役割ではない。

ただヒマラヤ登山をめぐる状況そのものが当時とは大きく変わってしまった現在でも、目標と方法、組織と個人といった基本的な問題は、常に存在する。

拙文が今後日本山岳会からヒマラヤを目指す人々に、それらを考えるうえでのみきっかけとなれば、と願っている。



6月15日、西峰に登頂した高見隊員